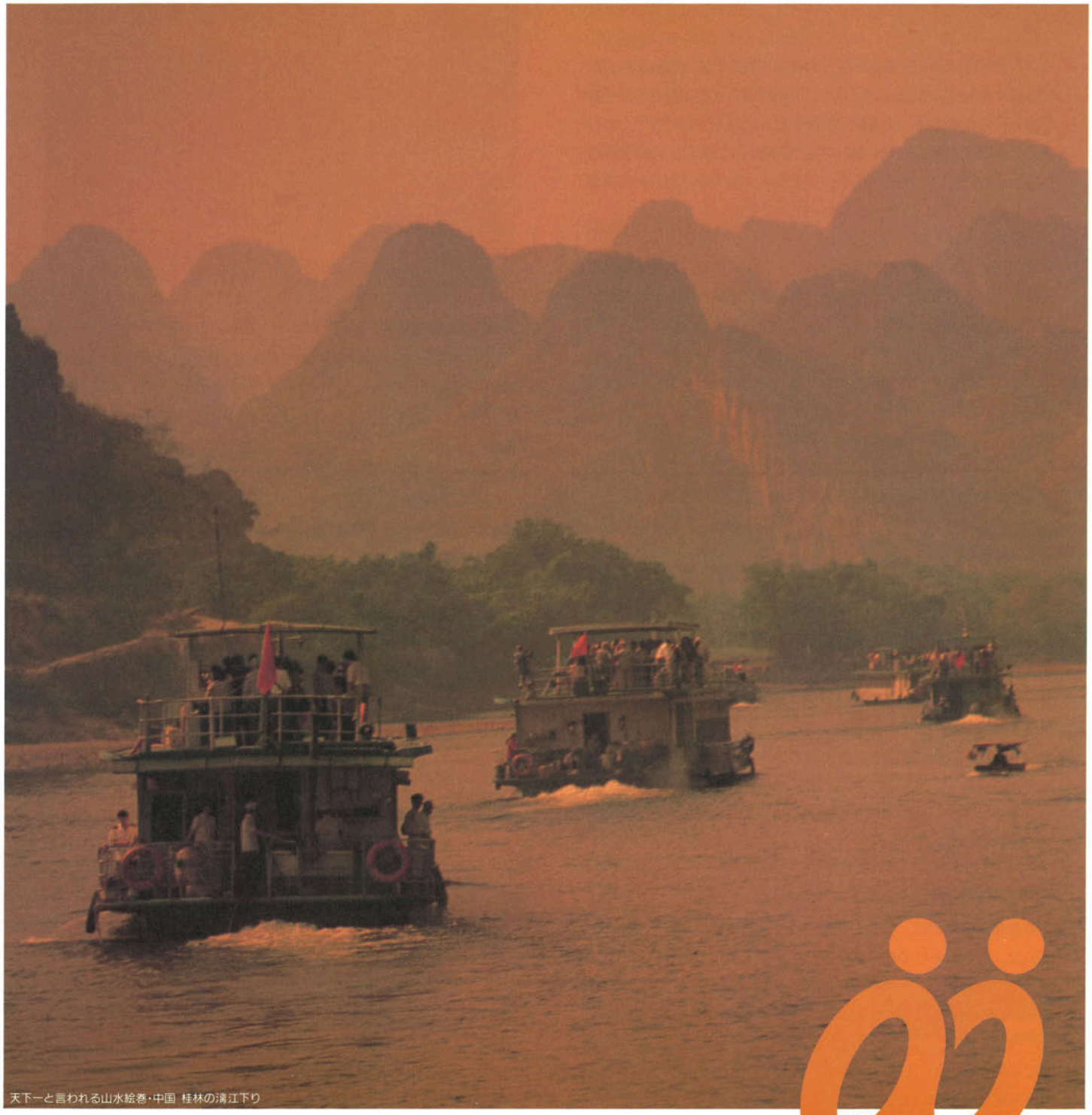
エイジアン・ブリーズ 4号・平成4年(1992年)2月発行・年3回発行

Asian Breeze



天下一と言われる山水絵巻・中国 桂林の漓江下り

第2回 アジア女性会議—北九州……2

いま、女性たちは——WOMEN TODAY——……4

アジア各国"風"事情——特集——……5

フォーラムの窓……7

KFAW

FEBRUARY 1992 No.4

2nd KITAKYUSHU CONFERENCE ON ASIAN WOMEN
第2回アジア女性会議ー北九州

アジア女性交流・研究フォーラムでは、平成3年（1991年）12月1日(日)～2日(月)、「交流」と「研究」を統合する主要事業として「第2回アジア女性会議ー北九州」を開催しました。

この会議は、アジアの女性が抱える問題を共に考え、相互理解を図るとともに女性の地位向上を目指すため、昨年度に引き続き開催したもので、北九州市内外から約1000人が参加しました。

今回は、「政策決定における女性」をメインテーマに、初日に国際シンポジウム、日韓共同研究報告、ワークショップ、バザール、市民交流会、2日目に「研究と討論」を行いました。

ここでは、国際シンポジウム、「研究と討論」を中心に、この会議の概要を紹介します。

国際シンポジウム

■テーマ　「政策決定における女性」
■パネリスト　レティシア・ラモス・シャハニ（フィリピン上院議員）
スパトラ・マスディト（タイ前総理府大臣）
森山　眞弓（参議院議員）
久保田眞苗（参議院議員）
末吉　興一（北九州市長）
■コーディネーター　野中ともよ（ジャーナリスト）

ボーダーレスの時代

ベルリンの壁の崩壊、東欧諸国の社会体制の変革に象徴されるように、現代はまさに激動の時代と言えます。このような変化の中にあって、「21世紀に向かって私たちの社会が発展していくためには、男性と女性がパートナーとして、共に手を取り合って社会へ参画していくことが必要である。そのためには、女性の意思決定、いわゆるディシジョン・メイキングへの参画が重要な鍵を握っている」とコーディネーターの野中氏が問題提起し、各パネリストの基調報告が行われました。

女性と政治

基調報告の中では、共通の問題として各パネリストから「意思決定には、国政における政策決定から、家庭における消費行動の決定まで、さまざまな次元のものがあるが、こと政治に関しては、『男の世界』であるという誤った社会的認識がある」との指摘がありました。

この問題については、「政治は私たちから遠いもののように見えるが、意思決定のプロセスそのものであり、実は私たちの生活に深く入り込んでいる」「女性自身も政治を自分のものと受けとめ、自分の家庭や子供の問題と、世界や国の問題が不可分であることを理解することが大切である」「米ソ冷戦構造の解体後、アジア地域の安全保障問題を考えていく必要があるが、命を再生産して、それを送り出していくという女性の立場から平和の問題にもっと積極的に係わっていくべきである」などさまざまな意見が出され、女性と政治についての基本的認識が確認されました。

▲公開シンポジウム

政策決定参画への戦略

続いて行われた討論では、女性が政策決定の場へ参画するための戦略に議論が及びました。

まず、森山氏が「政治や選挙制度の仕組みを改善し、個人に大きな負担がかからないようにすることが女性の政界進出にとって大きな条件である」と、また、久保田氏が「戦略としては、クォーター（割当）制度の採用が考えられる。これは、議員、党員、審議会の委員等の数について、あらかじめ女性の枠を一定割合まで設けて女性の参画を図ろうとするものである」と提案しました。

続いて、末吉氏は「地方政治は、環境問題や子供の教育の問題など身近な問題が山積みにされており、女性の政策決定への参画は重要な意味を持っている」と指摘しました。また、マスディト氏は「女性は政治家としての経験が不足しているので、女性政治家を養成するためのトレーニングが必要である。タイでは、すでに民間の女性組織がプログラムを開発して、選挙の際のキャンペーンやスピーチの方法について訓練している」と具体的取り組みを紹介しました。

これに対して、シャハニ氏は、「男性によって作られたピラミッド型社会の中で、単に女性は数を増やすだけでなく、女性であるからこそできるものの見方を政策決定において生かすことも大切である」と主張しました。

21世紀への展望

このような議論を通じて、「今や国際化時代であり、地球はますます狭くなっている。世界の国ぐにがそれぞれの文化、宗教、社会制度の違いをお互いに理解し、自国の枠を越えて、平和的共存の実現に努めなければならない。こうしたグローバルな問題に対して、女性は、人類の半数を代表するものとして、男性と対等な立場で参画していくことが必要である」と21世紀への展望が示されました。最後に、「女性問題を考えるとき、確かに伝統的な因習、あるいは政治システムや教育制度に問題があるかもしれないが、それと同時に女性自身の中にある『政治とは自分に関係がないもの』という自己規制が大きなネックになっているのではないか。私たち自身の日常の営みそのものが政治であることを認識し、宇宙船地球号の中で21世紀に向けて、地球規模で女性の連帯を図っていくことが大切である」と女性の連帯の必要性が強調されました。

研究と討論

「研究と討論」については、自由発表部会とテーマ部会の二つが行われました。自由発表部会では、家庭の主婦から研究者まで幅広い層の、公募で選ばれた９人の報告者がアジアの女性問題について自由なテーマで発表。また、テーマ部会では、「開発と女性」をテーマに、専門的な研究者を中心に基調報告及び討論が行われました。

ここでは、テーマ部会の内容を紹介します。

■基調報告者　西川　　潤（早稲田大学教授）
鈴木　陽子（日本労働組合総連合会国際局部長）
田村　慶子（下関市立大学助教授）
萩原なつ子（鶴川女子短期大学非常勤講師）

■司　会　者　篠崎　正美（アジア女性交流・研究フォーラム主席研究員）

まず、はじめに基調報告が行われました。西川氏は「Development を発展に替えて開発と訳すのは疑問。発展とは、本来閉じて縮こまっていたものが広がっていくことである。しかし、これまでの成長一辺倒の開発によって、人間の内面的価値が大幅に切り捨てられてきた」と開発の定義について問題提起、さらに「開発から内発的発展へ」の考え方を示しました。次に、萩原氏がインタビュー調査の結果をもとに、マレーシアの多国籍企業において、農村から都市へ流出してきた女子労働者の現状を報告、開発過程で健康破壊や格差が広がっていく問題を指摘しました。田村氏は多民族国家であるマレーシアで、女性の政治参加は量的には増大しているにもかかわらず、重大な意思決定の場からは疎外されている実態を報告しました。最後に、鈴木氏がタイにあるＩＬＯアジア太平洋地域事務所で労働者教育を担当していた際の経験をもとに、政治、経済、教育、文化などの多角的な視点からタイの女性の開発過程への参入の現状を紹介しました。

こうした基調報告を踏まえ、討論が展開されました。

まず、国際経済分業体制のもと、北と南の経済格差が大きくなっている中で、開発が果たして女性に恩恵をもたらしているのかという点が話題になりました。「開発途上国では、社会開発によって、多くの人びとが農村から都市へ流出し、伝統的な家族関係から切り離され、アイデンティティの喪失に陥っている」「特にその中での女性の問題は大きい」などの意見が出されました。

次に、日本のＯＤＡ（政府開発援助）について、「ＯＤＡはその７割が港や鉄道、電力などの社会資本に使われており、これらは言わば企業進出の際の経済基盤を作り上げるものである」「たとえば、保育所を作り、そこで働くことのできる保母を養成するための資金など目に見えにくいものには援助されない」などの批判が出されました。

さらに、日本人として、開発が多くの国ぐにおいて生活の質の向上をもたらすためには、どういった協力ができるのかといった点にも議論が及びました。これに対しては「アジアの国ぐにへの日本の経済的進出によって、環境破壊や企業での人権侵害が起っている場合もある。こうした問題に対して、我われ日本人は、違う国の問題として扱うのではなく、自分自身の問題としてとらえる視点を持つべきだ」「納税者の立場からＯＤＡを監視していきたい」などの発言がなされました。

日韓共同研究報告

アジアにおいて「開発と女性」の問題を考えるとき、経済開発が社会の基礎集団である家族、そして女性に及ぼしている影響は非常に大きなものがあります。逆にまた、アジア的な家族のあり方が経済の発展に果たしている役割も考察する必要があります。

そこで、フォーラムでは、設立後最初の研究の主な取り組みとして、韓国女性開発院との共同研究によって、東アジア地域の中で経済成長を達成し、同じ儒教文化圏に属する日本と韓国について、家族意識の現状を比較研究しました。

この研究結果を、韓国女性開発院のファー・スン・ビュン主任研究員とフォーラムの篠崎正美主席研究員が報告しました。

ワークショップ

アジアの女性問題をテーマに、公募による次の市民団体が自主研究会の場として、意見発表、情報交換などを行いました。

ＯＡＳＣ（わたしたちのアジアセミナーサークル）
ぐるーぷ：ＮＯ！セクシュアル・ハラスメント
東アジアを考える会
ＫＩＵ（九州国際大学）アジア研究会
ＷＷＢ／ジャパン九州連絡事務所

バザール

今回、初めての試みとして、アジアの女性の経済的自立を助けるため、ＯＡＳＣ、シャプラニール、ユニフェム（国連婦人開発基金）の協力を得て、タイ、バングラデシュ、インドの農村女性が作った手工芸品を販売しました。

▲バザール

いま、女性たちは――WOMEN TODAY――

国連婦人開発基金の強化と民間活動

(財)市川房枝記念会事務局長
山口みつ子

平等・開発・平和の三つの目標を掲げた国際婦人年から17年目を迎えようとする今、「国際婦人年」が死語にならずに女性間の連帯のキーワードになっている意味を改めて問い直したい。

第1に国際婦人年に設定された1975年は、日本の女性が男女平等の権利を憲法で保障されて29年を経たときであった。国際婦人年世界会議で世界行動計画が採択され、それをものさしに平等を測ってみたら、保障されている平等権の形該化を女性たちは思い知らされた。

国連の「外圧」は、民間団体のみならず、政府、自治体を席捲し、男女平等を目指す国内行動計画が作り上げられた。女子差別撤廃条約の批准、男女雇用機会均等法の制定は、平等の新たな枠組みとなった。しかし、法制的には平等の基盤は敷かれたが、根強い慣習的な男女の性別役割意識に構築された社会構造が立ちはだかっており、一層果敢に構造改革に取り組まねばならないところにきている。

第2に、平等・開発・平和という国連の提唱した3面プログラムが、日本では国内の男女平等問題が中心となり、開発における女性問題がクローズアップされたのは数年前からで、世界の婦人問題の潮流に乗り遅れた。国や自治体の行動計画には「国際協力」「国際交流」という項目はあるが、「開発における女性支援」という明確な位置づけがなく、3面プログラムは片肺飛行の状況であった。

国際婦人年の設定が南北問題に深く係わり、貧困からの開放には経済的独立が必要で、国連は1960年から第1次国連開発の十年を設定、第2次、第3次へと先進諸国の開発援助が行われている。その開発問題の解決には、女性のあらゆる分野への全面参画が不可欠とされ、第2次開発の十年の期央期を国際婦人年とし、「開発」が主要目標になった。開発途上国の女性は人口の半数を占め、家族のための食料、飲料水の調達、生活必需品を得るための厳しい労働に従事している。女性のこうした貢献が社会的に評価を受けないため、改善のための技術、研修、融資を受ける機会も少ない。1975年の国際婦人年に「国際婦人年のための基金」が設置され、その後は、「国連婦人の十年基金」と改称、国連婦人の十年が終了した。

1985年以降は「国連婦人開発基金（UNIFEM）」として、国連開発計画（UNDP）の1セクションとして自主的に運営されている。

基金は、各国政府の拠出金、民間団体、個人の寄付でまかなっている。これによって、途上国の草の根の貧しい女性たちの開発努力に対し、少額ではあるが直接資金援助をしている。各国政府の拠出金は1990年までに103か国・4400万ドル、NGOと個人からの寄付180万ドルである。日本政府は、1990年61万ドル、1991年68万ドル拠出しているが、ノルウェー、フィンランド、カナダ、アメリカ、オランダの先進国がそれぞれ約100万ドルを拠出していることに比較すると「経済大国日本」の名に見合っていないと言える。

全国組織の50団体で構成している国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会は、国内の男女平等問題から開発・平和への活動を強化する方向に発展し、1990年11月に開いた「平等・開発・平和に向けての民間女性会議」で「開発途上国の女性の自立のために『国連婦人開発基金』を支援する特別決議」を採択、同時に会場で寄付を募り、UNIFEMへ送金した。この決議に基づいて、国際婦人年連絡会ユニフェム委員会を設置し、UNIFEMの活動のキャンペーン、継続的な募金活動のほか、政府に対し、UNIFEMへの拠出金の増額を要望してきた。

1991年12月9日には、UNIFEMの活動に関心を持っている横浜女性フォーラム、北九州市のアジア女性交流・研究フォーラム、福岡市女性センター、東京都婦人青少年部、広島レディースロータリーに連絡会が呼びかけ、国連と承認協定を締結し得る「UNIFEM日本国内委員会（仮称）」の組織化に向けて、初の懇談会が開かれた。UNIFEMの活動は、零細な資金で途上国の女性の自立を手助けする極めて具体的な行為なのである。協力する側の後戻りも手抜きも許されない厳しい一面がある。

しかし、貧しさから招来する痛みを分かち合い、その何分の1かを、コーヒー1杯の節約が役立つことを思えば、誰にでもできる行為だと思う。そうした考えを広めることがUNIFEM活動の目的でもある。民間団体の自発的な参加を軸に、全国的な支援の広がりを願っている。

海外通信員レポート特集

罹災地の生活

Elena L. Samonteさん
〈フィリピン〉

フィリピンでは長いこと災害に見舞われています。中でも最も深刻で被害が長引いているのがピナツボ火山の噴火です。私たちは、ピナツボ火山の罹災者たちの生活状況を調査するために、現地に出かけて行きました。

最初に訪れた村は、パンパンガのアノナス村。この村には272世帯が住んでいたのですが、そのほとんどの家が、火山灰によって全半壊しました。第２次世界大戦後からずっとこの村に住んでいるグロリアという74歳の女性は、テントでの避難生活を送る大変さを語っていました。「長年住みなれた家を離れなきゃいけないのは、とてもつらいです」。

確かに、このような状況では、ストレスがたまります。まず、きれいな流水がありません。飲み水や、洗濯用の水は、よそにもらいに行くしかありません。食事もテントの中で作ります。日中、テントの中は、耐えられないほど暑くなります。

サパング・バトのプレシーという未亡人は、４人の子供と６人の孫の面倒を見ながらお店を経営していますが、店にはほとんど品物がありません。品物を輸送するためには火山泥流で覆われた地域を通らなければならず、輸送料が非常に高くつくからです。また、いつ火山灰が降ってくるか分からないので、夜もおちおち眠れない日が続いています。睡眠時間は３時間程度です。

私たちは車を乗り継いで、もう１か所、ポトレロ村を訪問しました。この村に住む18歳のリタは、先生になる勉強をしている大学２年生です。しかし、火山が爆発したために学校へ通えなくなりました。田んぼが火山灰で埋まってしまい、父親は米作ができなくなりました。母親がきゅうりやキャベツを売って、かろうじて一家が生活しています。

罹災後、ポトレロ村へ入ったのは、私たちが初めてでした。村へ入るには歩いて川を渡らなければならず、長いこと水かさが２メートル以上になっていたからです。村の向こうにはもう１本川が流れていますが、もし、両方の川が同時にあふれていたら、今頃、ポトレロ村は消えてなくなっていたかもしれません。

（フィリピン大学助教授）

▲アノナス村でのテント生活（フィリピン）

マレーシアの魅力

仲間まち子さん
〈マレーシア〉

▲タイプーサン（マレーシア）

福岡を飛び立ち、約６時間のフライトを終えると、そこはもう汗のにじみ出る常夏の国マレーシアです。空港の到着ロビーに出迎えに来ている多種多様の人びとの顔を見るとき、ああ、ここは日本ではない、マレーシアなのだと実感します。

マレーシアは主に、マレー系、中国系、インド系といったいろいろな民族が一緒に生活している多民族国家です。たとえ人種が異なっていても皆、マレーシア人です。聞こえてくる会話は、同じ民族間ではそれぞれの民族の言語を使い、マレー系の人と他の民族が話す時はマレー語、日本人や欧米人などのいわゆる外国人と話すときは英語を使っています。そのためか、マレーシア人は少なくとも２か国語以上を操れる人がかなりいて、１か国語しかしゃべれない人の多い日本人にとっては羨ましい限りです。多民族国家であるゆえに、子供のころから自分の民族以外の民族の文化に接し、お互いに助け合って生きていくうちに自然と覚えていくのでしょうか。

マレーシアに住んでいて一番楽しいことの一つにお祭があります。民族の数だけお祭もあるというように、大きなものではイスラム教徒の断食明けの大祭日（ハリ・ラヤ・プアサ）、中国正月（チャイニーズ・ニューイヤー）、インド系住民のお祭のタイプーサン、クリスマスなどがあります。それぞれのお祭は、それぞれの宗教であるイスラム教、仏教、ヒンズー教、キリスト教に基づいて行われています。お祭の日にはその主役となる民族がきれいに着飾って、友人宅を訪問する姿があちこちで見られます。お祝いの仕方も、たとえば、断食明けの大祭日はマレー人だけの間で訪問し合うのではなく、インド人の友人が訪ねたり、日本人が招かれたりと、人種、民族の違いを越えてみんなで祝います。タンプーサンでは、背中、胸、鼻に太い針金を突き刺し、重たそうなアーチ型をしたものをしょって、決められたヒンズー寺院からもう一つのヒンズー寺院へと何キロも歩きます。歩いている人を見ると半ば陶酔状態になっているようです。太い針を抜いたあとは別に出血しているわけでもなく、とても神秘的なものを感じるお祭です。このように異なった民族の文化や伝統をお互いに認め合っている点がこの国の魅力だと思います。

マレーシアは、他の文化、民族、人種を何の抵抗もなく、すんなりと受け入れてくれます。日本で頻繁に言われている「国際化」について考えるとき、この国はよい見本になるような気がします。

（主婦）

女性と教育

Luwarsih Pringgoadisurjoさん
〈インドネシア〉

開発途上国では、女性を取り巻く状況を改善し、女性が国の開発の担い手となり、同時に受益者となるよう開発計画を進めています。そのためには、教育が大変に重要です。しかし、実際には、開発途上国の多くの女性は、十分な教育や訓練を受ける機会がありません。宗教、文化、経済的な理由のほか、女性自身が市民としての権利を知らないということもあります。女性の教育を充実すれば、家庭生活においても、国の発展にもよい効果が現れます。

インドネシアの地方に行くと、小学校も満足に終えていない女の子が大勢います。経済的な理由から、女の子よりも、男の子に教育の機会が与えられるのです。地方では、農業は今でも主要な産業であり、女性は、農業生産や家計収入に極めて重要な貢献をしています。しかし、最近では機械技術が導入されてきたため、女性は農業活動からはじき出され、農業から収入を得る機会が減ってきました。地方に住む多くの女性は教育水準が低く、他の職業でも、低賃金の仕事しか見つけられません。そのため、いろいろな問題が生じてきています。

地方に住む成人の教育のために、トレーニングプログラムが進められています。ここでは、農業、家内工業、健康、栄養、家族計画などさまざまな訓練が実施されています。状況を改善していくためには、訓練の内容はもちろんのこと、訓練を受ける機会を平等にすることが大切です。訓練を受けるとどのように状況がよくなるか、受けなかったらどれほど不利益になるか、女性に経験させることが必要でしょう。より重要なのは、女性たちが開発プログラムに参加しようとする意欲を持つことです。彼女たちが自発的に動き出し、状況を改善していくためには、まず、訓練や開発プログラムに関する十分な情報を知らせることが大切です。

また、プログラムは、女性を男性社会から切り離してしまうのではなく、男も女も共に家族や社会の発展のための責務を負っている、という認識のもとに作成されなければなりません。男性だけが農業技術研修に参加するのはおかしいし、女性だけが家族計画プログラムに参加するのは配慮に欠

タイの女たち

加藤真理子さん
〈タイ〉

内職をする農村の女性たち（タイ）

雨期が明けてからタイの冬は始まります。田植えはすでに終え、あとは稲刈を待つばかりのこの時期は、結婚のシーズンでもあり、バンコクなど都会に出稼ぎに出ていた人も実家に帰り、家族全員がそろって楽しいひとときを過ごします。そして、このひとときのあと、若い人たちの多くは、ここタイ東北部の村から、バンコクなどの都市へ出稼ぎに戻って行きます。

よく、「田舎では仕事がない、農業だけでは食えないからバンコクに行く」と聞きます。貧しい農村では義務教育の6年を終えると、親の手伝いをするか出稼ぎに行くかするため、中学校に進める人が少ないのが現状です。学歴が低いと職を得ても、給料の安い日雇い労働か住み込みの洗濯婦、家政婦、あるいは工場の単純労働といった仕事しかありません。それでも男も女も出稼ぎに出ます。農村の仕事のように肉体労働が重要な場合は、男が力仕事を担うため、男は外の仕事、女は家の中の仕事と役割分担がありますが、都市での仕事の場合、特に学歴や技術がない場合には、女の方がいろいろなサービス業に雇用の機会が開かれており、経済面でも女は一家の大黒柱となります。

しかし、女が出稼ぎに行ってしまったあと残された子供はどうなるのでしょうか。夫婦共に出ていったあとは、子供は親戚に預けられ、ほとんど親と会うことがありません。親戚や村落共同体が子供を守ってくれるというものの、家庭を持たない子供はどうしても親の愛情が不足してしまいます。農村の女たちは、夫が出稼ぎに行ったあとの家の仕事や農作業など夫の分まで働き、出稼ぎに行っても男に負けず働き、結局貧しさというのは女の方に大きくのしかかってくる問題です。

タイで見かける女たちは本当によく働きます。しかしその陰に隠れた子供たちの問題も見逃せません。

（コンケーン大学 大学院生）

私の姑

王　静さん
〈中国〉

中国では、「姑」と聞くと、何千年も続いてきた大家族主義という意識のせいか、すぐ「厳しい、権力のある」と思う人が多いようです。今日は、私の姑を紹介します。

姑は、今年52歳。2年前に定年退職して、今は化学工場の手伝いをしながら、舅と二人で上海に住んでいます。姑は今から30年前に結婚しました。結婚前後の数年間、ちょうど中国は経済的に困難な状況に落ち込み、国は負担を減らすために呼び掛けを行ったので、姑は自ら国管企業をやめました。いったんは家庭の主婦になったのですが、男女二人の子供が生まれたのちは、子供を育てながら、家計のため、また町の工場で働き始めました。こうして姑は定年まで働き、子供たちは大学を出て、結婚し、家庭を作りました。

親として、年をとったら、子供と一緒に余生を送りたいと考えるのは、伝統的な大家族主義のもとでは、ごく当たり前の考えです。しかし、ここ10年来中国は対外開放政策を取っているため、勉強などのために若い人が海外へ出ることが多くなり、子供たちと一緒に暮らしていない親が増えています。母親の心は、どんなにか寂しく不安なことでしょう。姑は以前、次のような話をしてくれました。「私の親の時代は、親が年をとると、子供に世話をしてもらうという昔からの習わしを守っていたよ。でも時代は変わったのだから、母さんも考えを変えなくっちゃ。子供が夢をかなえ将来を築こうと外国で頑張っているのだから、たとえ親がその犠牲になっても悔やむことはないよ」。実際、私の姑は今も二人の子供を海外へ行かせており、その内の一人、つまり私の夫は今、日本へ行っています。

姑と嫁の関係は、従来から扱いにくい問題の一つです。昔の大家族の時代だと嫁は完全に姑の言いなりだったので問題は表面化しなかったのですが、今の自由な社会では、嫁の家庭で占める地位が変わり、姑と嫁の関係も変わってきました。

「昔は、嫁は他人の娘だという昔ながらの考え方があったので、姑は嫁に対して非常につらくあたったのよ。でも、姑が嫁に本当の家族のように接すれば、嫁の方も、姑を自分の本当の母親として考えるようになると思うの」と私の姑は、母親が自分の娘に対するように接してくれます。以前1年ぐらい姑と一緒に暮らしたことがありましたが、私たちはこの年の末に居民委員会から年度「王好家庭」賞を授けられました。

私もこれから、平凡ではありますが、子を思いやる優しい姑のような母親になりたいと思います。お姑さま、いつまでもお元気でいてくださいね。

（繊維工場勤務）

「王好家庭」賞：姑と嫁との関係がよく、家庭が穏やかで近所づきあいがよい家族に対しての表彰状

けると言えましょう。地方の女性のための成人教育は、女性の参画を促し、生活を向上させていくために、継続的に進めていく必要があります。

（インドネシア科学院研究員）

▲地方の女性（25才で3人の子供がいる）（インドネシア）

電話相談室から

山口のり子さん
〈シンガポール〉

シンガポール唯一のフェミニストグループAWAREが、女のためのホットライン（電話相談）を開いたのは1990年の10月でした。AWAREウィメンズ・センターのホットライン専用室には2台の電話が置かれ、4か月間、50時間のトレーニングを受けたボランティア約50人が、ローテーションを組んで、毎日4時から10時まで（土・日は除く）電話を受けています。

シンガポールは多民族国家のため、地下鉄では四つの主要言語の、英語、中国語、マレー語、タミール語でアナウンスがあります。だからホットラインがいろいろな言葉で対応するということは重要なことであり、この4言語のほか、仏語、独語でも、また私が加わっているので日本語でも受け付けます。

今のところ月300件近い相談が寄せられています。子育ての悩み、夫の暴力、職場でのセクシュアル・ハラスメント、性の悩み、ボーイフレンドとの関係など、相談内容は実にさまざまです。各民族特有の伝統文化や習慣、あるいは宗教を背景にした問題もあります。たとえば、親・きょうだいを一番大切にする風習を持つ中国系の夫が、妻をメイドのように扱うとか、イスラム教徒であるマレー系の夫が、若い女性を連れて来て、第2夫人として認めるよう妻に迫るなどのケースです。

最も多いのは、夫婦関係や離婚に関する法律の相談です。日本と同様にシンガポールでも晩婚化の傾向があり、離婚率も上昇しています。女たちの生き方が多様化し、結婚生活で妻が夫に求めるものも変化しているのに、男たちはそれに気づかず、依然として古い女性観を持っています。その意識のギャップの中で女たちが孤立化している様子が、電話相談を通じてチラチラと見えるのですが、これは日本にも共通してはいないでしょうか。

私たち相談員は、相談者のニーズに応じて法律相談所やシェルター・カウンセリング・サービスなどを紹介したり、その他、必要な情報を提供しています。しかし肝心なことは、「聴く」ということです。それは、こちらの価値観を押し付けるのではなく、本人が最良の判断を下せるようサポートし、それを尊重することが大切なのです。だから話している間に、相談者が自ら次のステップに気づいて、明るい声に変わったりした時は、こちらがハッピーな気分になってしまいます。"Listening is caring." 聴くことは人を受け入れ愛することだとつくづく思います。

（日本語教師）

▲電話相談室の風景（シンガポール）　規則により正面からの写真は撮ることができません。

フォーラムの窓

「日韓共同研究」あれこれ

当フォーラムの研究部門では、1990年10月の設立以降、最初5年間の研究テーマを「開発と女性」としている。とりわけ、経済的開発に伴い、社会の基礎的単位である家族及び女性の生活がどのように変化してきたかに焦点を当て、アジアの諸地域で比較研究することを目標にしている。

最初の比較研究を、地理的にも一番近く、歴史的・文化的にも関係が深い韓国と日本の間で行いたいと考えた。大変幸いなことに、「韓国女性開発院」もアジアの女性に係わるこうした地域協力に賛同され、ファー・スン・ビュンさんという素晴らしい研究のパートナーにお会いすることができた。ビュンさんは、フランスで6年間の大学院生活を送られ、フランスと韓国の離婚の比較研究で博士号を取得された新進気鋭の女性である。ちなみに、韓国女性開発院では、こうした研究者が合せて数十名も働いておられるとのこと。本当に羨ましい。

ビュンさんも私も、お互いに相手の国の言葉を勉強し始めたばかり。彼女のお得意はフランス語。そこで、二人の流暢とも言えない英語を共通語として、海をはさんでの二人三脚の1年が続いたのである。調査のデザイン、調査表の検討、データの処理・分析・解釈と、何とか目標達成にこぎつけたが、この過程で一番困ったのが、私自身のComputer操作のilliteracyと、フロッピーの非互換性だった。悪戦苦闘の甲斐あって（?）、私自身の能力は何とか必要レベルに前進したが、後者の問題は個々の研究者の努力で解決しない。国際化が言われるが、意外に先端技術をめぐって国境の壁が高い部分があることを、身をもって感じさせられた。

研究結果については、英語・日本語・韓国語の3か国で今春報告書を刊行予定であるが、ここでは、1、2の点について私自身の感想も含めて触れてみたい。

①経済発展と家族の構造・機能変動

東アジアの中でも日本と韓国の経済成長は著しい。これに伴って両国とも、欧米先進産業国で家族に起こっている共通の変化を経験している。小家族化・核家族化・労働者家族化・共働き化等である。中でも小家族化への変化は急速で、日本ではさらに個人化・多様化へと動きつつある。小家族化の主因は両国とも出生率の大幅な減少である。韓国の高齢化率はまだ5％台だが、やがてわが国と同様、高齢化社会の到来が問題となるだろう。日本では出生率低下の1.53ショックは専ら労働力不足の原因として深刻に受けとめられているが、韓国ではこの問題は大きくなく、むしろ儒教主義的な男児選好の影響を受けて出生子の性比のアンバランスが社会問題となることが指摘されている。

②家族意識

韓国では、日本に比べて家族への一体感、各成員の絆意識、情緒的満足度がかなり高い。また現実には核家族率が高く小家族で住んでいる人が多いにもかかわらず、既婚のきょうだいやその配偶者、伯父、甥など共住共食していない人まで広く「家族」と考える傾向が強い。この「家族主義」が現代の韓国で持つ意味をよく検討したいと思っている。

アジア女性交流・研究フォーラム
主席研究員　**篠崎　正美**

INFORMATION

●第2期海外通信員の募集

フォーラムでは、アジア諸国と幅広いネットワークを形成するため、海外通信員制度を設けています。通信員レポートは、本号の特集を始め、Asian Breezeに掲載しており、読者の皆さんとアジアを結ぶ貴重な架け橋となっています。

このたび第2期の海外通信員を下記のとおり募集します。

今回は、人間形成の礎とも言える「教育」をテーマに取り上げ、中でも、生活そのものであり教育の原点でもある「家庭教育」に焦点を当てたレポートを提出していただきます。

多くの方がたの応募をお待ちしています。

■募集人員：15人
■任　　期：平成4年(1992年)5月～平成5年(1993年)3月
■応募資格：アジア諸国（日本を除く）に住んでいて、日本語か英語でレポートを年3回提出できる人（国籍、性別は問いません）
■申し込み：次の書類をフォーラムへ提出してください。
①レポート　テーマ「家庭教育と女性」
字　数　日本語1000字か英語600words
②履歴書
③写真各1枚（顔写真、レポート内容の写真）
■締　　切：平成4年(1992年)4月8日(水)（消印有効）

詳しいお問い合せ、お申し込みは、フォーラム(093)551-1220まで。

●"Asian Breeze"定期購読受付中

"Asian Breeze"は、北九州市広聴課、各区市民相談室などで無料で配布しています。また、ご希望の方には、直接郵送による定期購読を受け付けますが、この場合は送料をご負担いただきます。

お申し込みは、フォーラム(093)551-1220まで。

※Asian Breezeに対するご意見やご感想をお寄せください。

※掲載記事などの無断転載・複写を禁じます。

●トーク「女たちのアジア」北九州

トーク「女たちのアジア」北九州が4月11日(土)に北九州国際会議場で開かれます。

この会議は、「アジアにおける女性の地位向上、平等、開発、平和のために貢献する」ことを目的に、1985年のフィリピン会議に引き続き今年日本で開催される「アジア女性会議」の地方展開として開催されるものです。本会議のため来日する女性問題専門家を講師に迎え、参加の多くの皆さんと貴重なひとときを共有します。

テーマは、「語ろう・つなごう　女たちのアジアを」。

講演会やドキュメント・スライドの上映などのほか、テーマ部会では海外からの4人の女性問題専門家を中心に、開発、メディア、環境、労働について、参加者の皆さんと掘り下げた討論を行います。

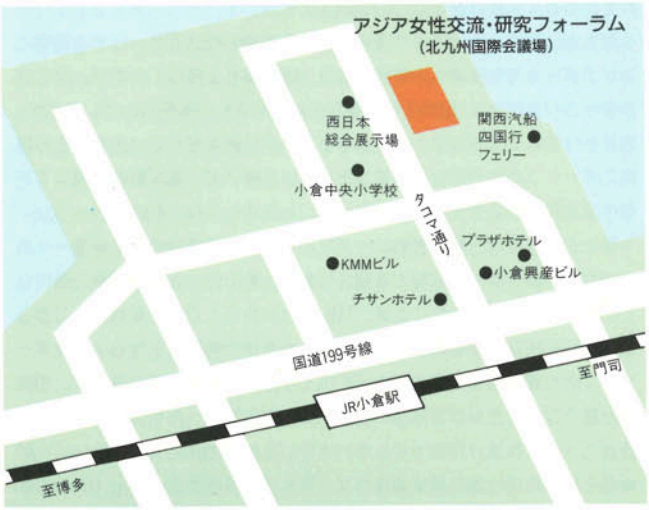
お誘い合せの上、ご参加ください。

参加費：1000円（ティー・パーティー参加者は別途2000円）

参加申し込み、お問い合せは、トーク「女たちのアジア」北九州実行委員会(093)551-1220まで。

編集後記

Asian Breeze創刊から、もう1年を迎えます。
歯がはえた、ハイハイをしたと一喜一憂する新米の母親と同じように、一号一号の完成に感激したこの1年でした。
育児も2年目は子供の将来を考えるときです。
編集部も気持ちを新たに、誕生日に乾杯。　〈S〉



KFAW
アジア女性交流・研究フォーラム
〒802 北九州市小倉北区浅野3丁目9－30 北九州国際会議場8F
PHONE(093)551－1220　FAX(093)551－7535